

【隣人を自分のように愛しなさい！】

(Rev. Jung nam-chul)

聖書の本文：ルカの福音書10章25－37節 ・ 今週の御言葉：ガラテヤ人への手紙5章14節

あいする教会の家族のみなさん！レンにツ猛暑が続いている中一週間も主の平安の中でお元気で、過ごされましたか。聖書に記されているイエス様のたとえ話の中でこの世にでもよく知られているほど、よく知られ、大きく影響を及ぼした箇所の一つが今日の本文の内容だと思います。この比喻の内容はある人が、道端で、強盗に襲われ、着物をはぎ取られ、殴りつけられましたが、ある良いサマリヤの人によって助けられるということです。この話は実際起こった出来事ではなく、イエス様がある真理を教えるために例を出して使われたたとえ話です。

イエス様はこのたとえ話の結論として“あなたも行って同じようにしなさい。(37節)”とおっしゃったように良いサマリヤ人がやったようにすれば良いし、それがこのたとえ話の確信に見えるかも知れません。しかし、今日のこの話はそんなに簡単なことではありません。アメリカのピラデルピアの長老教会の牧師でもあり、聖書学者であるJamesボイス先生はこのたとえ話こそ、イエス様が言われたたとえ話の中で一番難解なたとえ話の一つであると言ったことがあります。

愛する信仰の家族のみなさん！

いつも聖書を正しく理解するためには、その一節だけ見るのではなく、その聖書の前後の内容、その章全体の内容がどういう内容であるかをよく探らなければなりません。ですから、今日この良いサマリヤ人のたとえ話もイエス様がどのような状況の中でこの話をされたかをよく調べる必要があります。良いサマリヤ人のたとえ話はある出来事と関連があります。その出来事はある律法学者がイエス様に問いかけた質問の内容と関連があります。

＜本文＞

ある日、律法の専門家がイエス様を試すために訪ねて来て言います。“先生、何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。(ルカ10:25)”イエス様を試すためのよくない目的で問われた質問でしたが、この質問自体は人間の一番根本的で、大切な質問だったと思います。聖書には永遠のいのちに対して多く記されていますが、特にヨハネの福音書に永遠の命についてヨハネの福音書17章3節ではこう記されています。

“その永遠の命とは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエスキリストを知ることです。”

彼の質問にイエス様はどのように答えたのですか。10章26節です。

“律法には、なんと書いてありますか。あなたはどのように読んでいますか。”問い返すイエス様の質問に律法学者は律法学者らしく正解で答えます。

27節です。“心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。”イスラエル人々の中に613個の戒めがありました。“やりなさい”だという律法の戒めが248個、“やってはいけない”ことは365個でした。他の箇所であるマタイの福音書22章36－40ではこのような多くの律法の中で何が一番大切なのか、律法学者の質問にイエス様は簡潔に、簡単に3つを教えて下さいました。“神様の愛、自己の愛、隣り人の愛”でした。つまり、＜愛＞これが一番核心となるものと教えて下さいました。

イエス様は旧約聖書の申命記6章5節、レビ記19章18節の御言葉を引用した答えたのです。

この律法学者の答えにイエス様の反応はどうでしたか。28節です。

“その通りです。それを実行しなさい。そうすれば、命を得ます。”

彼はイエス様の霊的権威と正しい答えにそれ以上論争はできませんでした。しかし、イエス様をためしに来た律法の専門家はまた自分の正しさを示すためにもう一つの質問をします。

“では私の隣り人とはだれのことですか。”

これもイエス様をわなに陥らせ、困らせるための質問でした。当時ユダヤ人たちにとって隣り人とはまるで‘丸’のようなことでした。はっきりとまるの外と中を分けていました。つまり、家族との関係に従って家族のような家筋(いえすじ)の人、自分のユダヤ民族、そしてユダヤ教の同じ信仰をもっている人だけが隣り人という丸の中に入れた彼らだけが自分たちの隣り人だと信じ込んでいました。それ以外のまるの外の人たちはみな異邦人であり、隣り人の対象に絶対になれないという考え方が持っていたことをイエス様は御存知でした。

しかし、この地上に来られたイエス様はユダヤ人たちが持っていた隣り人という意識や基準には全く異なった行動をなさっていました。イエス様は当時ユダヤ人たちが罪人だと烙印(らくいん)を押された人々と交わったり、ユダヤ人たちが行っている異邦人たちと付き合ったり、彼らの悩みなどを聞いて助けて下さいました。それでイエス様はるかの福音書7章34節で、収税人や罪人の仲間だと言われたのです。そういうわけで律法の専門家は“私の隣り人とはだれのことですか。”という挑戦的な質問を投げ出していたのです。

もしイエス様が当時ユダヤ人たちが持っていた観念に従って答えるなら、律法の専門家は今まで、イエス様が罪人と異邦人たちと付き合ったことがどれほど間違ったことなのかを暴(あば)くつもりだったし、もしイエス様が隣り人という境(さかい)を罪人と隣りにまで拡大(かくだい)するなら、イエスの答えは当時ユダヤ人たちが信奉している律法に反していることだとあばくつもりでした。

このようにイエス様を混乱させようとし、自分は正しいとあらわすつもりで律法の専門家の意図でした。

みなさんはこの質問がいかに愚かで、間違った質問だったのかをすぐ分かると思います。

イエス様はそれに関してあなたの隣り人とはこういう人だとかですぐ答えずに、例えで言われたのが今日の内容です。

このたとえ話には6種類の人たちが登場しています。だれですか。

強盗、強盗に襲われたあるユダヤ人、宗教指導者であった祭司、神の聖殿で奉仕をしていたレビ人、ユダヤ人たちに冷遇され、蔑まれていたユダヤ人のハーブ混血の人たちであったサマリヤ人、そして、宿屋の主人です。

あるユダヤ人がエルサレムからエリコという町へ下る道で強盗に襲われて持っていた所有すべてを奪われ、半殺しの状態になっています。たまたま当時イスラエルの民族の宗教指導者で敬虔な姿の祭司一人その道を下って来まして、その姿を見ました。しかし、倒れているその人を見ても、反対側を通り過ぎて行ってしまいました。そして聖殿で奉仕をしていたレビ人も祭司と同じように通り過ぎて行ってしまいました。祭司も、レビ人も当時民たちの指導者であって、旧約の律法にも詳しく知っていた者たちでした。

しかし、彼らは自分たちが知っていた律法の知識とは反する行動を取っていました。

ところが、強盗に襲われた人が倒れているところに、あるサマリヤの人もそこを通ることになりました。

サマリヤ人というのは約750年前北イスラエルの民と異邦の国アッシリアの人たちの間で生まれた混血族でした。

サマリヤ人たちはユダヤ人にとって隣り人としてはあり得ない、決してそのように赦してもらえない存在でした。

ところが強盗に襲われて半殺しになっているユダヤ人を助けてくれた人は自分の民族ではなく、軽蔑されていたサマリヤ人だったのです。サマリヤ人は強盗に襲われている人をかわいそうに思い、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをしました。当時は、兼題のように治療の薬や医術(いじゅつ)が発達しなかったため傷にオリーブ油とぶどう酒を注ぐことは当時の治療の方法の一つであって、急いで命を救うための最善の行動をしたと言えます。

彼はそこで終らず、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱(かいほう)してやって次の日、宿屋の主人に介抱のお金を出し、お願いしてまた戻って来ることを約束して旅に出かけます。これがイエス様が言われたたとえ話のです。

イエス様はこのお言葉の後“この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣り人になったと思いますか。”と問われます。

みなさんはだれが強盗に襲われた人の隣り人だと思いますか。だれでも当然サマリヤ人だと言えるでしょう。

律法学者もその人に哀れみをかけてやった人だと答えます。実際今までの歴史の中で神様を愛した人々が人の命を救った愛の証しは多くあります。

その中で一つご紹介しますと、みなさんも御存知のように、ヒトラーはユダヤ人600万人を殺しました。わかりやすくさせるため、10万人を収容できるところ60箇所を作っておきました。ドイツだけでそうでした。旧ソ連でも500万人が殺されました。それだけではなく、ヨーロッパの中ポーランド、オーストリア、スペインなどヨーロッパの全域(ぜんいき)で約150万人のぐらいが亡くなりました。その時、ヒトラーはヨーロッパに住んでいたユダヤ人たちを目立つようにさせるため、ダビデの星を象徴する黄色の星をつけるようにしました。それは星はもう死刑の宣告ということでした。しかし、当時ヨーロッパの中ユダヤ人たちが一人も死ななかつた国がありました。デンマークという国でした。その時、デンマークの王様は神様を愛するクリスチャンでした。神様が愛されるユダヤ人だから、彼はデンマークの国民にみんな我々も胸に黄色の星をつけましようと言いながら、その国王からはじめ全国民がダビデの星をつけていたようです。

もしも、ユダヤ人のように誤解(ごかい)され殺されるかも知れない時代に王様からはじめぜんデンマークの国民がイスラエルの人々を救うため、守るため同じバッチをつけたのです。

これがまさにサマリヤ人のような隣り人への愛を表した姿ではないでしょうか。

そして、ここで今日のサマリヤ人のたとえ話の中で一つ大切な事実注目する必要があります。

愛する信仰の家族のみなさん！律法学者の質問は何でしたか。“私の隣り人とは、だれのことですか。(29節)”この短い質問は単純に見ると、まったく問題ないように見られます。却って自分の正しさを現そうとしたための質問だったので、結構立派ないつものように見られます。しかし、この質問には大きな問題が隠されています。この質問には自分がだれの隣り人になってあげるべきなのかではなく、だれが自分の隣り人になってくれるのかに考えています。この質問のより深い意味には、結構自己中心的に考えている姿が見られます。つまり、まるで自分が偉い人のように自分が隣り人を決めれるようとしています。この短い質問には、隣り人と言いながら、自分が愛せる人と愛せない人を自分が決めて、区別しようとしています。愛の義務の限界を自ら制限したりします。まるで、ユダヤ人たちのように自分を中心にした円にはいた人だけが自分の隣り人になれる人がだれだと思いませんかというように暗示されているわけです。実は律法学者にとって隣り人はいつも固定されていて、決まっていたわけです。

それに、対して、イエス様はそんな彼に向かってどのようにおっしゃいましたか。たとえ話の後“だれが、(強盗に襲われた者の)隣り人になったのか。(36節)”と反問されます。イエス様の質問は律法学者の質問と何が違いますか。

自分にだれが隣り人となってくれるのかとか、自分で愛すべき隣り人を選択し、先を引くところではなく、却って自分がだれの隣り人になってあげるべきなのかを強調しておられる質問の内容でした。だれが自分の隣り人になれるかではなく、自分が隣り人を選択する立場に立っているのではなく、強盗に襲われた者だとしても、だれでもあなたの助けが必要な人にあなたはいつも隣り人になるべきであることをこの質問を通してイエス様は教えようとしています。イエス様は良いサマリヤ人のたとえ話の後、この質問を通して、ユダヤ人たちがただ律法の知識だけ持っていて、行動の面においては、むしろこの律法の知識や捕らわれによって彼らがどれほど偏狭的(へんきょうてき)で排他的(はいててき)な態度なのかを批判し、指摘して下さったのです。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！

今日のこのイエス様の御言葉を通して私たちが教えられることは何ですか。

本当の隣り人は助けが必要な人を見ると、早速(さっそく)その人に対する愛を実践に移る人だと言われます。

だれが自分の隣り人となってくれるか、だれが自分を愛してくれるのか、だれが自分の助けてくれるのか待たないで、却って我々がだれでも、どんな人にも私たちが助け、愛を分け与え、助けてあげる隣り人になるべきです。これがイエス様が教える真の自分の隣り人なのです。

今日はますます律法学者のように我々の愛っていうものが自己中心的なものになっているのではないのでしょうか。

自分が愛せる人と愛せない人、赦せない人を自分勝手に決め線を引いてはいませんか。自分とかかわっている人、自分に益となる人だけでなく、助けが必要とされるなら、いつでも、どこでも、そしてだれにでも愛を、助けを施す者にならなければなりません。ある時は、サマリヤ人のようにお金と時間、そして、犠牲を払う必要があるかも知れません。真に神様を愛する人は同時にかならず隣り人をも愛せる！それを口だけではなく、実際に実行し、行なう人こそ、真のクリスチャンであり、正しい信仰であるとイエス様はそのように教えて下さいました。

聖フランシスコという人についてこのような話が伝わって来ています。ある夢の中でイエス様が現れて明日あなたを訪ねて来るとおっしゃいました。翌日冬の寒い朝でしたが、フランシスコはイエス様が本当に来て下さることを楽しみながら喜んでずっと待っていました。しかし、イエス様が来れませんでした。もう待てるのをやめて、家に入ろうかなと思ったその瞬間、イエス様ではなく、あるかわいそうこじきが上着もなく、通っていました。瞬間、寒そうに見えてフランシスコは自分の上着を脱いで彼に着させます。しかし、そのこじきは何一つ感謝の一言もなく、行っちゃいました。夜になって、来られると信じていたイエス様も来れなかなので寂しかったし、感謝もしなかったそのこじきに自分のコートをあげたのももったいなかったのかと思いつつ眠ったら、また夢の中でイエスさまが現れました。“イエス様なぜ今日来れなかったのですか。”訪ねると、“今日行ってたよ。”イエス様は答えます。“いつ来られたのですか”と聞いたら、“今日あなたのコートを脱いで渡しにくれたのではないか。”と主は答えました。彼はその瞬間、恥ずかしく思いつつ、一言でも感謝の言葉を返してくれなかったこじきに対して後悔していたことにすぐ、ベッドの下において、悔い改めたという話です。我々の周りにいる人々を愛することそれが主イエスキリストを愛することであることがこの話の教訓ではないのでしょうか。

マタイの福音書25章35-46節を読んで見ますと、主イエスキリストがその栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、すべての国々の民が、その御前に集められ分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きながら、右にいる人々を祝福しながらこう語って下さっています。

『35 あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿(やど)を貸し、36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』37 すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。25:38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。25:39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』25:40 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』

愛するみなさん、我々のまわりにかかわっている多くの小さい者一人を愛することがすなわち、イエス様を愛することなのです。

しかし、もちろん、ますますこの世は助けをもらっても感謝をせず、そのありがたさを現すのにもしみつたれになっている人が多いかも知れません。こういうわけで、愛を表すのにもとまどうかも知れません。しかし、これにもかかわらず、私たちは助けが必要な人に愛を分け与えて行く本当の隣り人として生きるべきです。

今日律法学者は知識としてよく知っていて答えました。ルカの福音書10章27節です。

“心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性をつくしてあなたの神である主を愛せよ。またあなたの隣り人を自身のように愛せよ。”とあります。”しかし、彼は頭だけでしているだけで終ってしまったかわいそうな人でした。真の信仰は頭で知るだけで終るのではなく、手足の信仰！つまり、すべての人々に愛の行いが伴われる信仰が大切であることを今日イエスキリストは教えて下さいました。イエス様は彼に決断を勧めています。ガラテヤ人への手紙5章14節に、“律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という一語をもって全うされるのです。”なかなか自己中心的である我々にはきっと難しいかも知れません。しかし、私たちが神様の愛を人に分け与える時こそ、神の愛はさらに豊かになると信じます。

“あなたも行って同じようにしなさい。(37節)”今私たちにも同じく言われているイエス様の命令ではありませんか。

最後に、クリスチャンでありながら、アメリカで30年間医者として働きながら、特に貧しい人々のためよく無料診療奉仕活動をやって来たフィルトフィットマン(1819-1892)という方は愛という者こそ、神様が人間に下さった一番の治療剤だと言いました。そんな彼にある人がこう訪ねました。“しかし、先生、もしその愛の薬があんまり聞かない時はどうするばいいんでしょうか。”と聞いたら、フィットマンは“その時は、2倍愛すれば聞きます。”と答えたそうです。

神様を心から愛する者は人をも愛します。回りの隣り人の自分のように愛しなさい！

今日も主イエスキリストのように愛の者として生きるように主は命じて下さっています。

今日みなさんの愛を持ってわけ与えるべきみなさんの隣人はだれですか。愛を分け合うところに神の御国が来ます。そのようになります。実践する一週間となりますように、愛を開け与えるところに神様の豊かな恵みと祝福の報いが与えられますように主イエスキリストの御名によってお祈りします。アーメン！